

# ブルーストと脳科学<sup>1</sup>

## — 記憶 —

青 柳 り さ

1996年、吉田城は『神経症者のいる文学ーバルザックからブルーストまでー』において次のように述べている。

人間の脳が生みだした文学作品や絵画といったフィクションの世界にも神経症は大きな問題として存在してきた。[…]  
21世紀は「脳の世紀」になるといわれ、学際的な脳の研究が国際神経科学会を中心に進められている。養老孟司氏は現代が「脳化社会」であると強調している。もし現代文明全体が人間の脳から生まれたものであるなら、脳を科学することはすなわち文明を深く理解することにつながるであろう。[…]  
精神（心）の座が脳にあるのだとしたら、神経の研究は人の心を研究することにつながるはずだ。文学や芸術の創造行為、あるいは信仰の問題を考察することは、どこかで心理学ないし医学が追求していることと交わるように思う。<sup>2</sup>

同年、脳科学者である伊藤正雄は「私たちはまだきわめて初歩的な段階にいます。物理学の歴史にたとえていえば15世紀か16世紀といったところでしょうか<sup>3</sup>」と語る。文学、哲学、芸術は、脳科学に先行しているのである。

たとえば、「閉じこめ症候群（locked-in syndrome）」というものがある。無動、無言であるが、意識は清明であり、随意的な眼球運動や瞬目が保たれている状態をさす。最近ではジュリアン・シュナーベル（Julien Schnabel）によって映画化された『潜水服は蝶の夢を見る（*Le scaphandre et le papillon*）』（2007年）で話題になった<sup>4</sup>。この「ロックト・イン・シンドローム」という用語は、1966年にフレッド・プラムとジェローム・ポズナーの二人が著した『昏

迷と昏睡の診断』<sup>5</sup>のなかで提唱されているが、彼らによれば、『モンテ・クリスト伯』（1845年）の登場人物ノワルティエ・ヴィルフォールが、ロックト・イン・シンドロームの最初の記載だということである。シャルコーがサルペトリエール病院に赴任するのが1862年である。それに17年先立ってデュマは「ロックト・イン・シンドローム」という病気の症状を小説のプロットに取り込んでいたのである<sup>6</sup>。

視覚芸術の領域では、たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチが「すべての色の組み合わせで最も心地よく感じられるのは、相対立する色から成り立っている場合である」と述べたのは今からおよそ500年前だが、反対色特性が発見され、このことが初めて生理学的に証明され、事実であるとされたのはいまからわずか40年ほど前なのである<sup>7</sup>。

ブルーストは、とりわけこのような人間の不思議に注目した作家であり、人間観察とその分析に優れた作家である。彼は医者でも科学者でもない、もちろん解剖の経験もない。その取り組みは、時に意識的であり時に無意識的である。しかしブルーストの作品は、後の科学的発見の予告に満ちており、人間探究、人間精神探究と人間発見の宝庫なのである。

## Ⅰ 変容する記憶

### 1 「ゲルマント公爵夫人と赤い靴」と「コンブレからのジルベルトの手紙」

1983年にM・スコット・ペックが、『平気で嘘をつく人たち』<sup>8</sup>という本を著した。アメリカにおいても日本においてもベストセラーとなったこの本のなかで、筆者はどんな町にも住んでいる私たちの傍ら

にいるごく普通の「嘘つきの邪悪な人々」の巧妙な責任転嫁と隠微な嘘をリアルに描き出している。かつて私は、『失われた時を求めて』の登場人物であるゲルマント公爵夫人にも、ジルベルトにも、邪悪とは言わないまでも、嘘をつく、あるいは自分の都合の良ように改竄していく何かがある、そこにブルーストが注目したのだと考えていた。

ゲルマント公爵夫人は、不治の病を告げに来たスワン話を聞くために割く時間はないが、公爵が赤いドレスに似合わないという黒い靴から、ドレスに似合う赤い靴に履き替えに戻る時間はある。

「オリアース、どうしようというんだ、とんでもない。黒い靴を履いたままじゃないか！ 赤いドレスに！ すぐに戻って赤い靴に履き替えてきなさい、そうでなければ」と、従僕に向かって「すぐに公爵夫人の小間使いに赤い靴をもってくるように伝えたまえ」<sup>9</sup>

500頁を隔て、この時の夜会についてゲルマント公爵夫人が覚えていたのはただ自分の衣装だけである。語り手は公爵夫人に、

「ゲルマント大公夫人のところにいらっしゃる前に、サン＝トゥーヴェルト夫人のところで晚餐をなさることになっていた日、あなたは赤いドレスに赤い靴をお召しになっていました、息をのむばかりでした、血の色をした大輪の花が、炎となって燃えるルビーさながらでした […]」<sup>10</sup>

と語る一方、「人は、深く考えなかったこと、他人の模倣、周囲の熱によって吹きこまれたことは、すぐに忘れてしまうものだ。熱が冷めればそれとともに私たちの記憶も更新される<sup>11</sup>」と考察する。そしてさらに時を経て（700頁を隔て）、ゲルマント公爵夫人の記憶から、スワンの訪問（忘れたいエピソード）は忘れ去られてしまい、「赤い靴」はより美しい「金色の靴」にすりかわってしまっている。

「ほんとうに赤い靴でしたかしら？ 私は金色の靴だと思っ

ていましたけれど」<sup>12</sup>

エピソードの残酷で悲しい印象に、「赤いドレスと黒い靴」、「赤いドレスと赤い靴」、「赤いドレスと金色の靴」という鮮やかで美しい取り合わせも相まって、忘れられないエピソードとなっている。

一方、ジルベルトは、大戦中（1914年）、戦争を避けてコンブレに疎開したと語り手に手紙を送る。しかし、その2年後の手紙では（3頁を隔てて紹介される）、彼女はタンソンヴィルを守るためにコンブレに赴き、その結果、父の館とその貴重なコレクションを守ることができたと、理由が180度変わってしまっている。

「ところで、あなたの幼友達を待ちうけていたものが何だったか想像してみてください」とジルベルトは手紙の終わりに書きそえていた。「私はドイツの飛行機を避けようとパリを発ちました、タンソンヴィルなら何もかも安全だと考えたからです。ところが着いて二日とたたないうちに何が起こったか、想像もつかないでしょう。ラ・フェール近くでわが部隊を打ち破ったドイツ軍がこの地方になだれこみ、一個連隊を従えたドイツの参謀本部がタンソンヴィル間近にあらわれました、私はその連中に宿を提供しないわけにはまいりませんでした、逃げようありません、もう汽車も何もなかったのです。」<sup>13</sup>

「ご存じではないかもしれませんが」と彼女は書いていた、「私がタンソンヴィルにまいりましてから、まもなく二年になろうとしています。私はドイツ軍と同時にこの地に着きました。皆は私を引き留めようとし、私は頭がおかしくなったように言われました。「どうして、パリにいれば安全なのに、みんなが逃げだそうとしているときに、敵に侵入された地方へ向けて発つんです。」そんな考え方が正しいことを認めなかったわけではありません。でもしかたありません、私のただ一つの長所は、卑怯じゃないということ、というよりも忠実なって申しませうか、私のたいせつなタンソンヴィルが脅かされているとわかっていて、管理の爺やを一人残してここを守らせる気にはなれませんでした。

私のいるべきところは彼の傍らだと思ったんです。それに、この決心のおかげで、どうにか館を救うことができました。— 近辺の館はすべて、持ち主が動転して逃げ出していまい、それこそ根こそぎ破壊されてしまいました — それに、館だけではありません、懐かしいパパがあんなにたいせつにしていた貴重なコレクションも救うことができたのです。」<sup>14</sup>

実際の生活のなかでも、何人かで思い出を語るとき、それぞれの人の語るバージョンが微妙に食い違っているということは私たちが日々経験していることである。そのようなとき私たちはつい相手方に不信感を抱く。しかしその一方で「自分の記憶は本当に正しいのか？」と自らの記憶を疑うこともある。スコット・ペックの説は、邪悪な人を設定し、人間を善と悪に分けることで一つの解答を示していた。しかし、主人公はまちがわないのか？ ジルベルトは本当は嘘をついているのか、いないのか？ 彼女は自分の手紙の内容を信じているのか？ 語り手は、ジルベルト自身が自分の手紙の内容を信じ込んでいると分析する。

ジルベルトはいまや、1914年に書いてよこしたように、ドイツ軍を逃れ避難するためではなく、逆にドイツ軍と対峙し彼らから館を守るためにタンソンヴィルに赴いたと思いこんでいたのである。<sup>15</sup>

人は記憶を意図的に改竄しているのではなく、記憶はひとりでの変形していつてしまうものである、このことは、20世紀の末になってようやく脳科学の領域で解明されることになる事実である。その事実を、20世紀の初め、プルーストは興味をもって観察し、小説のプロットに印象的なエピソードとしてとりこんでいたのである。

## 2 記憶の変容にかかわる研究

アメリカの心理学者ジョン・コートルは変形していく記憶について次のように述べる。

昼は記録保管人という顔をもつ記憶は、夜になると密かな情熱を燃やしている。自分自身についての話をせっせとこしらえているのだ。[...] そしてその物語は、生存の — 精神的な意味で自己の生き残りの — 問題なのだ。「前向きの錯覚」が精神衛生上必要不可欠であることは、今では、ますます多くの研究によって示されており、グリーンウォルド<sup>16</sup>が全体主義的エゴのせいにしたような歪みは、覇気があり能力を十分発揮できる人間の特徴であって、鬱状態の人の思考からは欠落していることがわかってきた。<sup>17</sup>

「記憶が変わっていく」ということに関する脳科学の分野での研究は1960 - 70年代から始まる。

1970年代に新しいタイプの記憶研究者たちは、こうした現象を解明しようとしてあえて研究室を飛び出した。かれらは意味のない綴りとか単語のリストを使っておこなう実験研究 — すなわち、ほんの数分間の記憶についての研究 — を放棄して、裁判での証言や日記、歴史的事件の回想など、現実世界の現象の調査に乗り出した。これとは別に独自に研究を進めていた脳の研究者は、主に記憶のしくみが私たちの考えていたようなものではなく、一生のうちに記憶は幾度も塗り替えられることを発見しつつあった。さらに心理学の別の一派で物語に興味を抱く学者たちは、人間の思考の持つ物語性に着目し、意味を持たせようとする人間の本能的欲求に注目すべきだと主張した。こうした研究がいくつも重なり合った結果、私たちは自伝的記憶に関する基本的概念を大きく転換させる必要に迫られている。それは、弁護士から恋人同士に至るまでのあらゆる人々にとって、記憶によって可能なこととそうでないことを知る必要のある人々にとって重要な意味をもつだろう。<sup>18</sup>

実は1970年代に始まる、というより再開すると行ったほうがよいかもしれない。というのも、フロイトがすでにこの事実に注目していたからである。

アメリカの精神科医ノーマン・ドイジは、その著書『脳は奇跡を起こす』において、スペイン出身の神経科学者であるアルバロ・パスカル＝レオーネ(Alvaro Pascual-Leone, 1961～)を引用する。

「脳の活動は、たえずこねている粘土のようなものです。わたしたちがなにをしても、この土のかたまりを形作ることになる。ただし、粘土の四角いかたまりからはじめて、それを丸いボールにして、また四角にもどすことはできるでしょう。でもそれは見た目は同じでも最初と同じ四角ではありません」<sup>19</sup>

あるいは、アメリカの神経学者ジェラルド・エデルマン (Gerald Maurice Edelman, 1929～, 1972年ノーベル賞受賞) も、その著書『脳は空より広いか』のなかで以下のように述べる。

非表象的記憶とは、移り変わる気候の影響を受けて変化する氷河のようなものだ。気候は信号に、氷河が溶けたり再び凍ったりするのはシナプス反応の変化に、氷河を伝って流れるたくさんの細流は神経路に、そしてそれら細流が流れ込む池は出力に喩えられる。気候の変化によって溶解・再凍結をくり返しながらくさんの小さな水の流れが縮退的に細流を形成する。そのようにしてできたたくさんの細流は、さまざまな形で合流したり連結したりして多様な水路が作られていく。その過程でときおり新しい池ができたりもする。このようにダイナミックな経過が、まったく同じパターンでくり返されることなど考えられない。しかし麓の池 — 出力によって生まれた状態 — はというと、おそらくそんなに変わらないのである。この見方でいくと、記憶には必然的に連想という要素が備わっており、決して同一ではありえない。それでもやはり、いろいろな制約のもと、十分効果的に同じような出力を生み出せるのである。<sup>20</sup>

2000年にノーベル医学生理学賞を受賞したエリック・カンデルの研究<sup>21</sup>も分子レベルでの脳の可塑性をテーマとしている。

ノーマン・ドイジは、1896年の時点でフロイトがフリースあての書簡ですでに記憶の可塑性について述べていることを指摘する。

可塑性に関する三番目の考察は記憶にまつわるものだ。彼(フロイト)は、「わたしたちが経験した出来事は、わたし

たちの精神に永続する記憶の痕跡をのこす」と教えられていた。だが、患者の治療をするうちに、記憶は一度だけ書きこまれるものでも、永遠に変わらないように「刻印」されるわけでもなく、その後の出来事によって変更され「書きかえ」られることがわかった。[……] 1896年に、フロイトは何度となくこう書いている。記憶の痕跡は「新しい状況にともなって配列しなおされ、書きかえられる。だから、私の理論の新しい点は、記憶はいちどだけではなく、何度も存在するということだ」。記憶はたえず書きかえられ、「国が創世神話において、伝説を構築する過程とあらゆる点で似ている」。<sup>22</sup>

このような記憶の可塑性、脳の可塑性については、実は、さらに遡って、1868年のジュール・コタール (Jules Cotard, 1840～1889) の研究にすでに現れていた<sup>23</sup>。『失われた時を求めて』のコタール医師 (Docteur Cottard) のモデルの一人ともされている人物である。和田恵里はこのジュール・コタールをめぐって、ブルーストとの接点を探り「シャルコーを起点とする現代医学の新たな展開を暗示する名前であったのではないか<sup>24</sup>」と述べている。ジュール・コタールはブルーストの父の友人でもあり、1868年、その『脳の部分的萎縮』と題する博士論文の段階ですでに「脳は必要とあれば、脳を再編成する可塑性を持っている」と、脳の可塑性、脳が変化することに注目しているのである<sup>25</sup>。しかし、脳の局在論が隆盛であったこの時代、脳の可塑性に関する彼の研究はほとんど注目されることなく、1960～1970年代頃まで可塑性理論にとっての暗黒時代が続くことになる。

100年前にブルーストが注目した人間の記憶についての洞察は、同時代 (1896年頃) にフロイトが臨床において観察し記述していた記憶の書き換えに関する新しい理論と呼応している。また医学の領域においても、1868年にジュール・コタールが博士論文に、脳の可塑性の可能性を記述している。ノーマン・ドイジによれば、さらに遡って1820年にマリー＝ジャン＝ピエール・フルーランスが可塑性の可能



性を論文に示しているということである<sup>26</sup>。医学の分野で100年以上無視されてきた研究が今、現在進行形で科学的に解明されつつある。

さらに現在では、人間の記憶が不確かであること、記憶が変わることにむしろ意味が見出されようとしている。コンピュータのような正確な記憶には、想像力の入り込む余地はない、新たなものを生み出す可能性をしめだしてしまう。曖昧な記憶とその後の記憶のブレ（書き換え）が、想像力に働きかけ、思いがけない新たな発見を促し、人類の進化に寄与してきたというのである<sup>27</sup>。

芸術的な創造力についても同様である。ゲルマント公爵夫人の曖昧な記憶とそのブレが、「赤いドレスと黒い靴」、「赤いドレスと赤い靴」、「赤いドレスと金色の靴」という印象的な美しいエピソードを生み出したのである。このエピソードは不確かな記憶の産物だったのである。

ここまで「変わってゆく記憶」についてとりあげたが、後半では「変わらない記憶」について考察したい。

## II 変わらない記憶

### 1 匂いと大脳辺縁系

21世紀になって漸く「匂い」の分野が科学の領域で脚光を浴びることになる。2004年、ノーベル医学生理学賞が「嗅覚」の研究に授与されている。また、2008年10月から2009年5月にかけて、パリのパレ・ドラ・デクーヴェルト (Palais de la Découverte) において「感じるために生まれた (Né pour sentir)」と題して「匂い」の展覧会が開催された。子供向けの展覧会だが、そこでまず引用されていたのは、『失われた時を求めて』の「マドレーヌの挿話」だった。

「匂い」については19世紀末から20世紀にかけて多くの作家たちがとりあげてきた。韻文の領域では、ボードレールの「旅への誘い」「髪の中の半球」をはじめ数限りなく、散文の領域でも「神経症は嗅覚の幻覚を引き起こす」としたユイスマンスらをあげ

ることができる。しかし、今日なお、「匂い」といえばまず引用されるのはやはりブルーストなのである。

何故、匂いの領域の研究が他の感覚の領域に比べて遅れているのか？ 脳の構造は、中心から、大脳基底核、大脳辺縁系、一番外側が大脳新皮質となる。すべての動物にそなわっている大脳基底核、大脳辺縁系に対し、人間を動物と区別し人間たらしめたのが大脳新皮質の発達であるとされている。従って20世紀の脳科学においては、最も原始的と考えられた大脳辺縁系の研究は重視されず、人間を人間たらしめている大脳新皮質の研究に集中し、五感のなかでもとりわけ知的とされ、また分析にも適した視覚野の研究に重点がおかれてきたのである。

2002年、養老孟司は、「匂いは非常に深く情動に結びつき、鼻の奥から脳に匂いを伝える神経繊維の五十パーセントは、大脳辺縁系、扁桃体という、いわゆる古い脳の方に入っていく、残りの五十パーセントが新皮質にあがってくる。目と耳と触覚は全部、百パーセントが大脳新皮質に入ってくる。[…][五感]とひと口に言うけれど、本当は、三感・二感である。味と香りについて子供のときの印象が非常に強く残るというのは、辺縁系と結びついているからであり、味の記憶というのは脳の深いところに入っているから変わりようがない<sup>28</sup>」と述べている。

「マドレーヌの挿話」は、味と香りについての典型的な例である。

味わってみるまでは、プティット・マドレーヌを見ても何一つ思い出さなかった、それは、その後幾度となく菓子屋の棚で見かけていても、食べることはなかったので、その映像がコンプレの日々と離れて、他のもっと最近の日々に結びついてしまったからかもしれない、また、かくも長い間、記憶の外に捨て置かれたそんな追想からは何一つ生き残っているものはなく、すべては分解してしまったからかもしれない。その形態は — 謹厳で敬虔な襷に包まれてあんなに豊かな肉感をもっていた菓子のあの小さな貝殻の形もまた — 無に、あるいは夢に帰してしまい、再び意識に結びつくだけの膨張力を失ってしまったのだ。しかし、古

い過去から、人々が死に、事物が崩壊した後、存続するものが何もなくとも、ただ匂いと味だけは、か弱くはあるが、より根強く、より非物質的に、執拗に、忠実に、なおも長い間、魂のように残っていて、他のすべてのものの廃墟の上に、喚起し、待ち受け、希望し、匂いと味のほとんど関知されないほどのわずかな滴の上に、追想の巨大な建築を、たわむことなく支えるのだ。<sup>29</sup>

現在では、嗅覚は感覚の中の例外であり、脳内回路において「におい」だけが特殊な回路になっていることが明らかにされている。見たもの、聞いたもの、食べたもの、皮膚で感じたものは、同じ経路、脳の「視床」を通して大脳皮質にとどく。視床は、大脳皮質に情報を受け渡す最終ゲートであり、たとえば、睡眠中はこのゲートがほぼ閉じていて、感覚情報が大脳皮質にとどかないようなくみになっている。（だから眠りが妨げられなくてすむ。）しかし「におい」は例外で、視床を経由せず、そのまま大脳皮質にとどけられる。したがって寝ている間も嗅覚は働いている。見たり聞いたりすることに関しては、寝ているときは感覚が低下するのだが、「におい」は脳にきちんととどいているというのである<sup>30</sup>。

また視覚情報の記憶と嗅覚情報の記憶を比べるという別の心理学者の実験例もある。「人の顔の図を見せ、数分後に他の図とまぜて召せても90%以上の被験者が最初の図を覚えている。ところが嗅覚情報の方は、数分後に他の臭いをかがせると、被験者の70%くらいしか最初の臭いを当てることができなかった。ところが、1ヶ月後、視覚情報は80%、3ヶ月後には60%台になってしまうのに対して、嗅覚情報のほうは、70%からあまり落ちなかった。一度覚えてしまえば記憶としてはなかなか消えにくい<sup>31</sup>」というものである。この資料では、嗅覚記憶は側頭葉にしまわれていると考えられている。（側頭葉は大脳辺縁系と接するあるいは交わっている部分である。）

無意識的記憶としてしばしば一括りに論じられるが、味覚と嗅覚の特殊性に着目しているという点において、マドレーヌの味と香りやシャンゼリゼの公

衆便所の臭いのエピソードは、蔓日日草を見て（視覚）30年前の幸福に入り込んでいくルソーや<sup>32</sup>、鵜のさえずり（聴覚）に過去へと運び去られるシャトーブリアン<sup>33</sup>、あるいは写真（視覚）によって過去を喚起するバルト<sup>34</sup>とも一線を画するものといえる。先にも述べたように、現在では味覚と嗅覚ではなく、嗅覚だけが例外とされるが、しかしブルーストの時代にあって、嗅覚の特殊性に言及した点はやはり注視に値する。

## 2 側頭葉てんかんと無意識的記憶

それでは、このような無意識的記憶は科学の領域においてはどのようにとりあげられてきたのか。

1880年、イギリスの神経学者ヒューリングス・ジャクソン（John Hughlings Jackson, 1835～1911、フロイトも尊敬していた神経学者、ブルーストともほぼ同時代である）が、脳の側頭葉に起こるてんかんを観察し、側頭葉発作が追想と経験的な幻覚をひきおこすことを推測している<sup>35</sup>。側頭葉とは匂いを伝える神経繊維の50%が入っていくとされていた場所である。この時点でジャクソンは「レミニサンス（無意識的記憶）」という用語も用いている<sup>36</sup>。つまり、ブルーストが匂いによって引き起こされる無意識的記憶に注目するのに少し先立つ同時代に、ジャクソンは、側頭葉への刺激が「夢幻状態」、「無意識的記憶」、「思い出」を喚起するすることを観察し記しているのである。

しかしながらジャクソンの指摘は、1868年の段階で脳の可塑性を証明したコタールの場合と同様、とるに足らぬこととしか見なされず、60年後のアメリカ生まれのカナダの神経外科医ワイルダー・ペンフィールド（Wilder Graves Penfield, 1891～1976）の証明を待つことになる。ペンフィールドは側頭葉てんかんの原因箇所を突き止め、ジャクソンが「複雑な精神状態」と呼んだ「過去に経験したものの正確で詳細な幻覚」を実験によって引き起こすことに成功する<sup>37</sup>。

この記憶について、オリバー・サックス（Oliver

Sacks, 1933～, イギリスの医師、脳神経学者、作家、映画『レナードの朝』の原作者としても知られる）は述べる。

ペンフィールドも指摘したことだが、そのようなてんかん性の幻覚・夢想は、けっして空想ではなく、記憶なのである。きわめて明確で鮮やかな記憶であり、しかも、原体験の時の感情もいっしょに思い出される。そのような記憶は、大脳皮質が刺激されるたびに呼び起こされる。普通の状態で思い出される記憶は、鮮明さにおいてとてもこれにかなわない。こうしたところから、ペンフィールドは次のように考えたのだ。脳は、その人の生涯の記憶を完全といていほど保持しつづけている。意識の流れすべては脳に保存され、生活のなかで必要なときにいつでも思い出すことができる。ところがてんかんや電氣的刺激という異常な条件のもとで喚起され、呼び出されることがある。<sup>39</sup>

ただし、ペンフィールドが「何が思い出されるかはまったく行き当たりばったりである」としたのに対し、オリバー・サックスはその背後に当人の心の奥深くに慢性的に存在する欲求というものがあると指摘し、自らの患者の臨床例を挙げる。

彼女は失われた大切な子供時代をとりもどしたのだ。彼女が感じていたのは、単なる「発作性の快楽」ではなく、心が震えるような深い喜びだった。それは、彼女のことばによれば、人生をかたく閉ざしていた扉があいたような気持ちだった。<sup>40</sup>

てんかんによる「追想」が、彼女の意識にもなかったものを掘りおこし、痙攣によって、完全な記憶としてよみがえらせたということであった。それによって彼女は、記憶に残らぬほど薄れてしまったか、あるいは抑圧をうけて意識にのぼることもなかった、ごく幼い頃の経験をとりもどすことができたのだ。生理学的には、発作がおさまれば「扉」は閉じる。事実閉じてしまったのだ。しかし、こうして経験そのものは忘れ去れることなく、強い永続的な印象として残ったのである。おかげで精神の健康がとりもどせた、という貴重な経験として彼女の心に刻みつけられた

のだ。<sup>41</sup>

このような記憶の重要性について、さらにサックスは、エスター・サラマンを引用する。

「無意識の記憶」について見事な本を書いたエスター・サラマンは、そのなかで、子供時代の神聖で貴重な記憶」を保持していること、あるいはそれを取りもどすことがいかに必要であるかを述べている（『時のつどい』1970）。もし子供時代の記憶がないと、人生はひどく味気ない、抛り所のないものになるという。そのような記憶を呼び戻せたことで得られる深い喜びや存在感について、彼女はドストエフスキーやブルーストなどの自伝から数多く引用して述べている。われわれはみな「過去に住むことができない亡命者」である、だからこそそれを取り戻さなければならないのだ。<sup>42</sup>

ペンフィールドも、サックスも、このような記憶を完全な記憶と考えていた。

（精神発作の最中に現れるのは（…）本物の記憶である。些細なものもあれば奥深いものもあるが、いずれにしても実際に起きたことの記憶なのである）。<sup>43</sup>

### 3 想起＝記憶の再構築

しかし、ペンフィールドの証明した記憶の永続性は、その後の研究で否定されていくことになる。1920年代から30年代にかけて、フレデリック・バートレット（Frederic Charles Bartlett, 1886～1969 イギリスの認知心理学の先駆者、この分野では草分け的存在とされている）は、記憶の鮮やかさと正確さは無関係であることを指摘し、記憶は「甦る」のではなく「再構成される」と考えた。

思い出すということは、生命のない固定された無数の断片的な痕跡を再活性化することではない。それは想像的な再構築、あるいは構築であって、過去の反応や経験の活動的な総体に対する自分の姿勢をもとに、普通はイメージや言葉というかたちで現れる際立った細部をつくりあげていくことだ。したがって、どれほど機械的な反復であっても、ほん



とうに正確であるはずはないし、たいして重要でもない。<sup>44</sup>

1970年代になって、エリザベス・ロフタス(Elizabeth F. Loftus, 1944～、アメリカの心理学者であり人間の記憶に関するエキスパート)とその夫ジェフリー・ロフタス(Geoffrey R. Loftus, 1945～)がフラッシュバックの現象をさらに綿密に調査することになる。そしてフラッシュバックによる鮮明な記憶の内容が、実験のたびに少しずつ異なってくることを明らかにした<sup>45</sup>。現在では、ジェラルド・エーデルマンの神経学研究の成果や<sup>46</sup>、ノーマン・ドイジらの神経可塑性の理論がパートレットの結論を裏付けてる。

エーデルマンが考える心には、カメラも機械的な働きもない。すべての記憶は関連づけ、一般化し、再分類するプロセスである。こうした見方をすれば、固定された記憶も、現在の色づけのない「純粋な」過去も存在しえない。パートレットと同じくエーデルマンも、常に動的なプロセスが働いているのであって、記憶とは再生ではなく再構築であると考えている。<sup>47</sup>

それではマドレーヌの挿話、鮮明に浮かび上がってきた無意識的記憶についてはどのように考えればよいのか？

19世紀、フロイトは、「記憶が変わるためには、それに意識と注意を向けなければならない<sup>48</sup>」と述べ、このことについて、21世紀、ノーマン・ドイジは「これは後年、神経科学者が証明したとおりである」と賛意を表明してる。それまでたやすく意識にのぼってこなかった記憶はほとんど書きかえられていない、それが意識にのぼった時点から書きかえが始まるのである<sup>49</sup>。

このことについてもブルーストは、「味わってみるまでは、プティット・マドレーヌを見ても何一つ思い出さなかった、それは、その後幾度となく菓子屋の棚で見かけていても、食べることはなかったの、その映像がコンプレの日々と離れて、他のもつと最近の日々に結びついてしまったからかもしれない

い」と、フロイトと同様に考えている。これは今日の科学によって証明されることになるのである。

私たちの脳の中には意識の何万倍もの無意識の情報、忘れていると思っている古い記憶、意味づけされず、整理されていない古い記憶が保存されている。なんらかのきっかけ(例えばてんかん、匂い、電気ショック等々)で視床(安定化装置、大脳基底核にあるとされる)そしてそれに続くA10神経の抑制がはずれると(ここにドーパミンが放出されると)、その情報が前頭葉へとどんどん送られる。抑制をはずされた無意識的記憶があふれ、古い脳では強い快感、新しい脳では強い精神高揚が起こり、かくして限りない至福感が感じられる。新しい自分と出会うことができる。それは深い宗教体験、芸術的創造性として現れるとされる<sup>50</sup>。ブルーストの匂いも、ドストエフスキーの側頭葉てんかん<sup>51</sup>も、そのきっかけと考えられる。ドストエフスキーはシベリア抑留中(1849～1854)に以下の言葉を残している。

みなさん、あなた方健康な人たちは、私たちがてんかん患者が体験する発作直前のわずかの時間がどんなに幸福なものか、考えさせないでしょう。マホメットはコーランの中で、自分は楽園を見、そしてその中にいたと言っている。小賢しい愚かな者は皆、マホメットは単なる嘘つきでベテン師だと思いこんでいる。しかし、違うのだ！彼は嘘なんかついていない！彼は私と同じてんかん患者であり、彼はてんかん発作の間、本当に楽園にいたのだ。私には、その至福の時間が数秒なのか数時間なのか、それとも何か月もつづいているのかはわからないけれど、それは真実であり、私は人生で得られるどんな楽しみも、その至福の時を交換するつもりはまったくない。<sup>52</sup>

ブルーストはジャクソンが側頭葉てんかんを観察し、側頭葉発作が追想と経験的な幻覚を引き起こすことを最初に推測したのとはほぼ同時代(1880年)、そしてその研究が無視されていった時代に、『失われた時を求めて』という作品の冒頭部にジャクソンと同じレミニサンスという言葉を用い、作品の方向性を示す最も重要なエピソードとしてマドレーヌの



挿話を取り込んでいた。「真の楽園とは失われた楽園である<sup>53</sup>」、かくして、ブルーストは「失われた楽園」を再構築していくことになる。意識にのぼった時点から記憶の書き換えは始まっているのである。

### III 記憶=ニューロンのネットワーク

今回、「変容する記憶」、「変わらない記憶」を中心に考察したが、この「記憶」についてはなお語るべきことが多く残っている。記憶は今日では、ニューロンのネットワークであるとされている。一つのニューロンの発火が関係するニューロンの発火を次から次へと促し星座をつくっていく、それが記憶である。それはまさしく文学におけるアナロジーでありメタフォールである。

『失われた時を求めて』のなかにこのようなネットワークのいくつかの例を見てみたい。

日の出は、ゆで卵や、絵入り新聞や、トランプのゲームや、力を入れて漕いでいるのに小舟がいっこうに進まない川の眺めなどと同様に、長い汽車旅の道連れである。<sup>54</sup>

(スワンの来訪を告げる) 二つずつ鳴る来客用の小鈴の、臆病な、卵形の、金色の響き。<sup>55</sup>

(スワンの帰って行くことを知らせる) 小鈴の、はねかえる、金属性の、とめどのない、甲高い、ひんやりとしたあの響き。<sup>56</sup>

ルーサンヴィルとかマルタンヴィルとかといった他の名は「…」すでに一種の薄暗い雰囲気の魅力をつ纏ってしまい、その魅力の中には、ジャムの味、薪の燃える匂い、ベルゴットの本の紙の匂い、向かいの家の砂岩の色などといったもののエキスが、おそらく混じっていたからであって、今日でも、それらの名は、私の記憶の底から、ガスの泡のように浮かび上がってくるとき、表面に達するまでに、様々に重ね合わされた幾多の環境の層を通りぬけなければならないのに、いまだにその特殊な効力を失わないのである。<sup>57</sup>

### IV 脳科学にかかわるその他のテーマ

本論では、記憶を中心に考察をすすめた。同時代の科学がほとんど顧みなかったことにブルーストが注意の目を向け、科学に先行して観察し、後に科学によって解明されていくという事例は、作品中に数限りなく見受けられる。

語り手はジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンの後裔であるゲルマント公爵夫人に限りない憧憬を抱き、その出会いを夢見ている。しかし最初の出会いは語り手を失望させる。彼女は「鼻の吹き出物があって、赤い顔をしていて、サズラ夫人と同じようにモーヴ色のスカーフをつけている<sup>58</sup>」のである。同様に、語り手が初めて体験する名女優、ラ・ベルマ公演も、彼を失望させてしまう<sup>59</sup>。このような場面で読者が感じる違和感は、プラトンの言うようにアイデアは我々の外にあるのではなく、我々の内に生成されていくものであるとする、現代の脳神経学者たちの理論と呼応している。

それは、『見出された時』のなかで、語り手が手にする『ゴンクール日記』に抱く違和感にも通じる。「それは資料的な、さらには歴史的な重要性をもつことができるかもしれない、しかし必ずしも芸術の真実とはいえない<sup>60</sup>」。そして、イギリスの進化心理学者、ニコラス・ハンフリー (Nicholas Humphrey, 1943～)、脳神経学者、セミール・ゼキ (Semir Zeki) の理論と共鳴する。セミール・ゼキはリアヌス・プリオン=ゲリーを次のように引用する。「そして彼が自らの絵に持ち込んだ物語、歪曲はまったく異質な種類のものだった。したがって、私たちがゴーギャンの絵を評価する理由は、彼が事実から逸脱することによって、より深い真理に近づいたという点である<sup>61</sup>」<sup>62</sup>。

ブルーストによるフェルメール、そしてエルスチールの分析は、セミール・ゼキによるフェルメール、モネの分析と共鳴する。

あるいはまた、イギリスの脳神経学者ラマチャンドラン (V. S. Ramachandran, 1951～) は、「なぜ森羅万象の記述は、つねに二つ — 一人称の記述と、

三人称の記述 — が並列しているのだろう、そしてなぜこの二つは全く異なるにもかかわらず相互補完的なのだろう<sup>63</sup>」と問いかける。客観的な科学はこれまで一人称を必要としてこなかった。ラマチャンドランはその科学の領域に一人称の視点を導入しようとしているのである。これは小説の世界における複合過去形の導入、そして『ジャン・サントゥイユ』の三人称から『失われた時を求めて』の語り手の一人称への移行を喚起する。

ジュネットが「イテラティブ」という用語と概念で「ひとつのエピソードがくり返される一連のエピソードを示す」ブルーストの文章を分析したのは1972年である。そして1982年、認知心理学者のウルリック・ナイサー（Ulric Neisser）は、ひとつのエピソードがくり返される一連のエピソードを「レピソード」と呼んだ<sup>64</sup>。心理学の用語である。

ブルーストが、そして文学あるいは芸術が追究してきた、笑い、人間的時間、眠りと覚醒、意識、想像力、これらすべてが現代の脳科学の研究領域である。

ディドロは、「創造的な天才とは、その本性から「これから発見されるべき事柄、新たな実験、未知の結果を嗅ぎ分ける」ことができるよう、そっと知らせてくれるような人々のことである、彼らは目で見ただけ以上のことを想像するが、それによって、想像の世界をつくりだすというよりもむしろ実在の世界に隠された秩序を把握するのだ<sup>65</sup>」と書いている。ブルーストの作品にはまだまだ「これから発見されるべき事柄、新たな実験、未知の結果」への示唆が溢れているのである。

## 注

- 1 「脳科学」というのは和製造語であり、「脳研究 (brain research)」(英語)、「神経科学(neuroscience)」(英語、フランス語)というのが一般的である。ただし、フランス語で「神経科学 (neuroscience) : 神経組織にかかわる学問研究の総体、神経生物学、神経化学、神経内分泌学、神経学、神経病理学、神経生理学」という語が用いられるようになるのは1982年からであり、ブルーストの時代には、「神経学 (neurologie) : 神経組織にかかわる解剖学、生理学、病理学、1691年から用いられる」という語が用いられていた。本論において「脳科学」というタイトルを選択したのは、現代およびブルーストの時代の脳研究にかかわるものだからである。
- 2 吉田城『神経症者のいる文学 — バルザックからブルーストまで —』名古屋大学出版会 1996年 p. 2 - 7.
- 3 立花隆『脳を究める 脳研究最前線』朝日新聞社(朝日文庫) 2001年(1996年) p. 31 - 32.
- 4 原作はJean-Dominique Bauby, *Le scaphandre et le papillon*, Robert Laffont, 1997.
- 5 Cf. F. Plum, J-B. Posner, *Diagnosis of stupor and Coma*, 2nd Ed., Davis, 1972.
- 6 Cf. 岩田誠『神経内科医の文学診断』白水社 2008年 p. 34 - 41.
- 7 セミール・ゼキ『脳は美をいかに感じるか—ピカソやモネが見た世界—』河内十郎監訳 日本経済新聞社 2002年 p. 24. (Semir Zeki, *Inner Vision : An Exploration of Art and the Brain*, Oxford University Press, 1999)
- 8 M・スコット・ペック『平気で嘘をつく人たち』森英明訳 草思社 1996年 (M. Scott Peck, *People of the lie*, New York, Simon & Schuster, 1983 / Scott Peck, *Les gens du mensonge*, traduit de l'américain par Guy Maheux, Flammarion, 1993)
- 9 « Oriane, qu'est-ce que vous alliez faire, malheureuse. Vous avez gardé vos souliers noirs ! Avec une toilette rouge ! Remontez vite mettre vos souliers rouges, ou bien, dit-il au valet de pied, dites tout de suite à la femme de chambre de Mme la duchesse de descendre des souliers rouges. » (II, *Gu.*, p. 883)
- 10 « Par exemple, madame, le jour où vous deviez dîner chez Mme de Saint-Euverte avant d'aller chez la princesse de Guermantes, vous aviez une robe toute rouge, avec des souliers rouges, vous étiez inouïe, vous aviez l'air d'une espèce de grande fleur de sang, d'un rubis en flammes, [...] » (III, *Pris.*, p. 547)
- 11 « On oublie [...] vite ce qu'on n'a pas pensé avec profondeur, ce qui vous a été dicté par l'imitation, par les passions environnantes. Elles changent et avec elles se modifie notre souvenir. » (III, *Pris.*, p. 548)
- 12 « Vous êtes sûr que c'étaient des souliers rouges ? Je croyais que c'était des souliers d'or. » (IV, *TR*, p. 588)
- 13 « Et là, imaginez-vous ce qui attendait votre vieille amie, m'écrivait en finissant Gilberte. J'étais partie de Paris pour fuir les avions allemands, me figurant qu'à Tansonville je serais à l'abri de tout. Je n'y étais pas depuis deux jours que vous n'imaginerez jamais ce qui arrivait : les Allemands qui envahissaient la région après avoir battu nos troupes près de La Fère, et un État-Major allemand suivi d'un régiment qui se présentait à la porte de Tansonville, et que j'étais obligée d'héberger, et pas moyen de fuir, plus un train, rien. » (IV, *TR*, p. 330 - 331)
- 14 « Vous ne savez peut-être pas, mon cher ami, me disait-elle, que voilà bientôt deux ans que je suis à Tansonville. J'y suis arrivée en même temps que les Allemands. Tout le monde avait voulu m'empêcher de partir. On me traitait de folle. "Comment, me disait-on, vous êtes en sûreté à Paris et vous partez pour ces régions envahies, juste au moment où tout le monde cherche à s'en échapper." Je ne méconnaissais pas tout ce que ce raisonnement avait de juste. Mais que voulez-vous, je n'ai qu'une seule qualité, je ne suis pas lâche, ou si vous aimez mieux je suis fidèle et quand j'ai su mon cher Tansonville menacé, je n'ai pas voulu que notre vieux régisseur restât seul à le défendre. Il m'a semblé que ma place était à ses côtés. Et c'est du reste grâce à cette résolution que j'ai pu sauver à peu près le château — quand tous les autres dans le voisinage, abandonnés par leurs propriétaires affolés, ont été presque tous détruits de fond en comble — et non seulement le château, mais les précieuses collections auxquelles mon cher Papa tenait tant. (IV, *TR*, p. 334)
- 15 « [...] Gilberte était persuadée maintenant qu'elle n'était pas allée à Tansonville comme elle me l'avait écrit en 1914 pour fuir les Allemands et pour être à l'abri, mais au contraire pour les rencontrer et défendre contre eux son château. » (IV, *TR*, p. 334 - 335)
- 16 Anthony Greenwald (1939 ~ ) 社会心理学者, ワシントン大学心理学教授。
- 17 ジョン・コートル『記憶は嘘をつく』石山鈴子訳 講談社 1997年 p. 167 - 169.  
« But memory's archivist by day has a secret passion by night : to fashion a story about itself, [...] it is a matter of survival — the physic survival of the self. A growing body of research now indicates that "positive illusion" is essential to mental health. The very kind of distortion that Greenwald attributed to the totalitarian ego has been found to characterize motivated, well-functioning individuals and to be missing from the thinking of those who suffer from depression. » (John Kotre, *White gloves : how we create ourselves through memory*, New York ,

- Free Press, 1995, p. 116 - 117)  
 ジョン・コートル, *op.cit.*, p. 18 - 19.
- 18 « In the 1970s, a new breed of memory researchers ventured forth from their laboratories to shed light on phenomena such as these. Abandoning research on nonsense syllables and word lists— on memories of a few minutes' duration— these scientists began to investigate such real-world phenomena as legal testimony, diaries, and recollections of historical events. Proceeding independently, researchers on the brain were finding that the principal organ of memory is not what we thought, that it revises itself over and over in the course of a lifetime. In still another branch of psychology, scholars interested in narrative were reminding us of the storied nature of human thought and insisting that we pay attention to the human drive to make meaning. Taken together, this work calls for a dramatic shift in our basic beliefs about autobiographical memory, a shift that will have profound implications for everyone from lawyers to lovers, for everyone who needs to know what memory can and cannot do. » (*Ibid.*, p. 7)
- 19 ノーマン・ドイジ『脳は奇跡を起こす』竹迫仁子訳 講談社 2008年 p. 246.  
 «— Comparons l'activité cérébrale à de la pâte à modeler que nous triturons sans arrêt, dit Pascual-Leone. Tous nos actes la façonnent. Si vous commencez avec un morceau de pâte à modeler en forme de cube et que vous en faites une boule, vous pouvez vous raviser et refaire un cube, mais ce ne sera pas exactement le même que le cube initial, malgré les apprentes. » (Norman Doidge, *Les étonnants pouvoirs de transformation du cerveau, Guérir grâce à la neuroplasticité*, traduit de l'américain par Eric Wessberge, Belfond, 2008, p. 239 / Norman Doidge, *The brain that changes itself*, Penguin Books, 2007)
- 20 ジェラルド・M・エーデルマン『脳は空より広いのか「私」という現象を考える』冬樹純子訳 豊嶋良一監修 草思社 2006年 p. 71 - 73.  
 « Un souvenir non représentationnel serait comme les altérations d'un glacier influencées par les changements de temps, interprétés comme des signaux. Dans cette analogie, le mélange et le refroidissement du glacier représentent les modifications de la réponse synaptique, les différents ruisseaux qui descendent la montagne représentent les voies neurales, et l'étang dans lequel ils se jettent, la sorte. Les mélanges et les refroidissements successifs dus aux changements de temps peuvent donner lieu à un ensemble dégénéré de voie d'eau descendant dans les ruisseaux, et certaines peuvent se rejoindre et s'associer de manière nouvelle. Parfois, un étang complètement nouveau peut se créer. Toutefois, en aucun cas il n'est probable que la même structure dynamique se répétera exactement, bien que les conséquences générales des changements survenus dans l'étang en aval — l'état de sortie — soient assez similaires. Selon cette conception, les souvenirs sont nécessairement associatifs et jamais identiques. Pour autant, sous diverses contraintes, il peuvent être suffisamment efficaces pour déclencher la même sortie. » (Gerald M. Edelman, *Plus vaste que le ciel, une nouvelle théorie générale du cerveau*, traduit de l'anglais (Etats-Unis) par Jean-Luc Fidel, Odile Jacob, 2004, p. 71 - 72 / Gerald M. Edelman, *Wider than sky. The phenomenal Gift of Consciousness*, Yale University Press, 2004)
- 21 Cf. Eric R. Kandel, *A la recherche de la mémoire, une nouvelle théorie de l'esprit*, Odile Jacob, 2007 / *In search of memory, The emergence of a new science of mind*, London, New York, W. W. Norton & Company, 2006
- 22 ノーマン・ドイジ, *op.cit.*, p. 265.  
 « Il existe enfin un troisième concept freudien étroitement lié à neuroplasticité, c'est celui de mémoire. Freud avait hérité de ses maîtres l'idée que les événements vécus par un individu laissent des traces mnémoniques dans son esprit. Quand il a commencé à travailler avec ses patients, il s'est rendu compte que les souvenirs ne sont pas fixés une fois pour toutes, gravés dans le marbre pour la vie entière, mais qu'ils peuvent être modifiés par des faits ultérieurs et retranscrits. [...] En 1896, Freud écrivait que, de temps en temps, les souvenirs d'enfance "subissent un processus de remaniement compliqué, tout à fait analogue à celui de la formation des légendes d'un peuple sur ses origines. Dans sa correspondance avec Wilhelm Fliess, il écrit également : "Ce qui est essentiellement nouveau dans ma théorie, c'est la thèse selon laquelle les souvenirs ne sont pas définis une fois pour toutes mais sujets à des retranscriptions en fonction des circonstances les plus récentes. » (Norman Doidge, *op.cit.*, p. 257)
- Cf. «Notes upon a case of obsessional neurosis » in *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. 10, 1906 p. 206 / Sigmund Freud, *Lettres à Wilhelm Fliess 1887 - 1904*, Edition complète, établie par Geffry Moussaieff Masson 1995, traduit de l'allemand par Françoise Kahn et François Robert, PUF, 2006, p. 201 - 278.
- 23 *Ibid.*, p. 31.
- 24 和田恵里「ブルーストと精神医学—ジュール・コタールをめぐる—」『青山フランス文学論集』復刊第15号



- 2006年 p. 55 - 77.
- 25 « Le cerveau était suffisamment plastique pour se réorganisait si nécessaire. » (Jules Cotard, *Etude sur l'atrophie partielle du cerveau*, le français, 1868, p. 89 - 93)
- 26 Marie-Jean-Pierre Flourens, *Recherches expérimentales sur les propriétés et les fonctions du système nerveux dans les animaux vertébrés*, Paris, Ballière, 1824 - 1942. (Cité par Norman Doidge, *op.cit.*, p. 32)
- 27 Cf. 池谷裕二『進化しすぎた脳』講談社 2007年 p.198 - 199 / 池谷裕二『ゆらぐ脳』文藝春秋 2008年 p. 84 - 85.
- 28 養老孟司×古館伊知郎『記憶がウソをつく!』扶桑社 2002, p. 165 - 170.
- 29 « La vue de la petite madeleine ne m'avait rien rappelé avant que je n'y eusse goûté ; peut-être parce que, en ayant souvent aperçu depuis, sans en manger, sur les tablettes des pâtisseries, leur image avait quitté ces jours de Combray pour se lier à d'autres plus récents ; peut-être parce que de ces souvenirs abandonnés si longtemps hors de la mémoire, rien ne survivait, tout s'était désagrégé ; les formes, — et celle aussi du petit coquillage de pâtisserie, si grassement sensuel, sous son plissage sévère et dévot — s'étaient abolies, ou, ensommeillées, avaient perdu la force d'expansion qui leur eût permis de rejoindre la conscience. Mais, quand d'un passé ancien rien ne subsiste, après la mort des êtres, après la destruction des choses, seules, plus frêles mais plus vivaces, plus immatérielles, plus persistantes, plus fidèles, l'odeur et la saveur restent encore longtemps, comme des âmes, à se rappeler, à attendre, à espérer, sur la ruine de tout le reste, à porter sans fléchir, sur leur gouttelette presque impalpable, l'édifice immense du souvenir. » (I, *Sw.*, p. 46)
- 30 池谷裕二『単純な脳、複雑な「私」』朝日出版社 2009年 p. 226 - 227.
- 31 岩田誠監修『図解雑学 脳のしくみ』ナツメ社 1998年 p. 202 - 203.
- 32 Jean - Jacques Rousseau, *Les Confessions*, Gallimard, Pléiade, *Œuvres complètes*, 1959, p. 226.
- 33 Chateaubriand, *Mémoire d'Outre-Tombe I*, Gallimard, Pléiade, 1951, p. 76.
- 34 Roland Barthes, *La Chambre claire*, Gallimard/Seuil, 1980, p. 109.
- 35 Cf. オリバー・サックス『妻を帽子とまちがえた男』晶文社 1992年 p. 229 / Oliver Sacks, *The man who mistook his wife for a hat*, London, Picador, 1985 / *L'homme qui prenait sa femme pour un chapeau, et autres récits cliniques*, traduit de l'anglais par Edith de la Héronnière, Seuil, 1988.
- 36 « Many examples of the “dreamy state” will be given later. A common one is the feeling which the patient calls variously “reminiscence”, “a sort of remembrance”, etc. » (Johon-Hughlings Jackson, *Evolution and dissolution of the nervous system*, Bristol, Thoemmes Press / Tokyo, Maruzen co. LTD, 1998, p. 11. (Classics in Psychology, 1855 - 1914, A Collection of Key Words [org pts, 1881 - 1887])
- 37 Wilder Penfield, P. Perot, « The brain's record of visual and auditory experience : a final summary and discussion. » in *Brain* 86 (1963), p. 595 - 696.
- 38 オリバー・サックス, *op.cit.*, p. 240 - 241. (Oliver Sacks, *L'homme qui prenait sa femme pour un chapeau, et autres récits cliniques*, p. 179 - 180)
- 39 *Ibid.*, p. 250. (*Ibid.*, p. 186)
- 40 *Ibid.*, p. 253. (*Ibid.*, p. 187 - 188)
- 41 *Ibid.*, p. 250-251. (*Ibid.*, p. 186)
- 42 Cf. Esther Salaman, *A Collection of Moments*, London, Longman, 1970.
- 43 *Ibid.*, p. 254. (*Ibid.*, p. 188)
- 44 Frederic Charles Bartlet, *Remembering, a study in experimental and social psychology*, Cambridge, Cambridge University Press, 1950 (1932) p. 213.
- 45 ジョン・コートル, *op.cit.*, p. 51.
- 46 Cf. Gerald Maurice Edelman, *The Remembered Present: A Biological Theory of Consciousness*, Basic Books, New York, 1990.
- 47 オリヴァー・サックス『火星の人類学者－脳神経科医と7人の奇妙な患者－』*op.cit.*, p. 250. (*op.cit.*, p. 233 - 234)
- 48 « Pour pouvoir être transformés les souvenirs doivent être conscients et susceptible de canaliser l'attention du sujet. » (Sigmund Freud, *The complete cettters of Sigmund Frend to Wilhelm Fliers*, MA, Harand University Press, 1985, p. 207)
- 49 Norman Doidge, *op.cit.*, p. 257.
- 50 「NHKスペシャル 驚異の小宇宙 人体II 脳と心 第6集 果てしなき脳宇宙～無意識と創造性～」1994.03.20放送
- 51 ハロルド・L・クローアーズ『ニュートンはなぜ人間嫌いになったのか 神経内科医が語る病と「生」のドラマ』加我牧子他訳 白揚社 1993年 p. 75. (Harold L. Klawans, *Newton's Madness : Further Tales of Clinical Neurology*, 1990, Harpercollins, 1990)
- Cf. T. Alajouanine, “Dostoevski's Epilepsy” in *Brain* 86 (1963), p. 209 - 218.
- H. Gastaut, “Fyodor Mikhailovitch Dostoevsky's Involuntary Contribution to The Symptomatology and Prognosis of Epilepsy” (William G. Lennox lecture 1977), *Eilepsia* 19 (1978), p. 186 - 201.
- P. H. A. Goskukil, “The Epilepsy of F. M. Dostoevsky”

- Epilepsia* 24 (1983), p. 658 - 667.
- E. Mayne, trans., *Letters of Fyodor Dostoevsky to His Family and Friends* New York, McGraw-Hill, 1964.
- James L. Rice, *Dostoevsky and the Healing Art*, Ann Arbor, MI, Ardis, 1985.
- A. Yamolinsky, *Dostoevsky, His Life and Art*, London, Arco Publications, 1957.
- 52 « The air was filled with a big noise and I tried to move. I felt the heaven was going down upon the earth, and that it had engulfed me. I have really touched God. He came into me myself ; yes, God exists, I cried, You all, healthy people, have no idea what joy that joy is which we epileptics experience the second before a seizure. Mahomet, in his Koran, said he had seen Paradise and had gone into it. All these stupid clever men are quite sure that he was a liar and a charlatan. But no, he did not lie, he really had been in Paradise during an attack of epilepsy ; he was a victim of this disease as I am. I do not know whether this joy lasts for seconds or hours or months, but believe me, I would not exchange it for all the delights of this world. » (Sónya Kovalévsky, *Her recollections of childhood*, New York, Century, 1885, *Recollections of childhood* 127)
- 53 « [...] les vrais paradis sont les paradis qu'on a perdus [...] » IV, *TR*, p. 449.
- 54 « Les levers de soleil sont un accompagnement des longs voyages en chemin de fer, comme les œufs durs, les journaux illustrés, les jeux de cartes, les rivières où des barques s'évertuent sans avancer. » (II, *JFF*, p. 15)
- 55 « [...] le double tintement timide, ovale et doré de la clochette [...] » (I, *Sw.*, p. 14)
- 56 « [...] ce tintement rebondissant, ferrugineux, intarissable, criard et frais de la petite sonette qui m'annonçais qu'enfin M. Swann était parti [...] » (IV, *TR*, p. 623)
- 57 « [...] à ces autres noms de Roussainville ou de Martinville qui [...] avaient acquis un certain charme sombre où s'étaient peut-être mélangés des extraits du goût des confitures, de l'odeur du feu de bois et du papier d'un livre de Bergotte, de la couleur de grès de la maison d'en face, et qui, aujourd'hui encore, quand ils remontent comme une bulle gazeuse, du fond de ma mémoire, conservent leur vertu spécifique à travers les couches superposées de milieux différents qu'ils ont à franchir avant d'atteindre jusqu'à la surface. » (II, *JFF*, p. 22)
- 58 « Jamais je ne m'étais avisé qu'elle pouvait avoir une figure rouge, une cravate mauve comme Mme Sazerat, [...] » (I, *Sw.*, p. 172)
- 59 I, *JFF*, p. 437 - 442.
- 60 IV, *TR*, p. 296 - 297.
- 61 Liane Brion-Guerry, *Cézanne et l'expression de l'espace*, Albin Michel, 1966, p. 64 - 65.
- 62 ニコラス・ハンフリー『内なる目 意識の進化論』垂水雄二訳 紀伊國屋書店 1993年, p. 16. (Nicholas Humphrey, *The inner eye*, with illustrations by Mel Calman, London, Faber in association with Channel Four, 1986)
- 63 V.S.ラマキャンドラン, サンドラ・ブレイクスリー『脳の中の幽霊』山下篤子訳 角川書店 1999年 p. 289. (V.S.Ramachandran, Sandra Blakeslee, *Phantom in the Brain, Probing the Misteries of the Human mind*, New York, 1998)
- 64 ジョン・コートル, *op.cit.*, p. 144 (John Kotre, *op.cit.*, p. 101)
- 65 ニコラス・ハンフリー, *op.cit.*, p. 32.  
Cf. Denis Diderot, *Pensée sur l'interprétation de la nature*, GF Flammarion, 2005 (1754), p. 77.

(あおやぎ・りさ 一般教育等／フランス文学)  
(2009年10月30日受理)